

詩 追憶のカイロ（2）

とよださなえ

以下の詩は、とよださなえさんが、NHK記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のことになりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。とよださんは、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて幼い子供たちを育てながら、近隣で紛争や内乱があれば、何があっても飛び出していくジャーナリストの鑑のような夫君の帰宅を、待ち続ける日々を過ごしていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいを感じることができるかもしれません。中東・イスラム地域で仕事をしたり、家族とともに暮らしたり、旅行に行ったりした経験のある人々には、詩を読み進むにつれて、これらの詩が紡がれた風景が瞼に浮かんでくること思います。

とよださなえさんの詩を、今後も、すこしづつ、ご紹介します。ゆっくり味わってください。

ラマダン

このスープをどうやって飲んだら良いか
どんな顔をして スプーンを取り上げれば良いのか
われこそは と思う方があつたら教えて下さい
今日から三十日間の勝敗が 私の顔つき一つで決まります
味見一つせず 埃だらけのテーブルにスープ皿を置いた
コックのアワードの無気力と不機嫌は
月給が安いせいでも私が叱りつけた訳でもありません
今朝から 水もパンもタバコも口にしていないせいです

日の出から日没までの断食を
今日から三十日間 イスラム教徒たちは始めました
ラマダンです
病人や老人はラマダンをしなくても良いのに
七十歳のアワードは 喜んでするといいます

しかし ドアの所に立っている彼が
テーブルの前の 無宗教の私たちに向いている目
その目の遠く
閉ざされた世界
イギリス・フランス・イタリア・ユダヤ
そして 日本人の元で働いてきた
永の年月
それぞれ この日をどう読んだのでしょうか

一日五回の祈りをかかさず
私たちの物品から こっそり
自ら喜捨を受け
ニコニコ笑って 不審へのバリケードを
作っているアワード

日は高く 四十度の熱気の中に立って
咽頭をひきつらせて立っている
老人
どんな顔をして このスプーンをとり上げて良いのか
教えて下さい

砂漠の中で

アスファルトの上を
小走りに
白い砂が走る

砂の意志なのか

風の意志なのか

地平線まで、つき抜け

直角に立つ 道の上を

大蛇の曲線で

通りすぎる砂

無限 無限 無限

右も砂

左も砂

私も砂

砂とアスファルト

砂嵐がはじまり

砥の粉を刷毛ではいたように

視界が薄れる中を

彼は

砂漠の一本道の

アスファルトから離れ

ガラベーヤの裾をひるがえし

カミソリの刃のような

砂の稜線の中に

消えていった

どこを切っても

空と砂が

世界を二分し

アスファルトの道だけが

方向を教えてくれる時

空も見えず 水もない

砂も 自分自身さえ見えなくなる

リビア砂漠の中
アスファルトを離れて
刻々変化する
砂のひだの中に入っていった男
太陽の光がかき消されると
足元から熱が
沸きのぼってくる

皮の草履が 磁石になるのか
砂の中で 魔術を顕すのか
仁王様と同じ筋肉の足で
ゆったりと 確実に
遠のいていった

私には読めない
どんな目をもっているのか
ガラベーヤの汚れも ほつれも
無にしてしまう程
彼の主人は 彼自身にみえた
執着のないきっぱりとした背中

さつき ほんの先程
道を尋ねただけなのに
心付け (バクシーシ) といって 手をのばしてきた
その彼は
ゆがんだ眼と いじけた臭いを
私にぶつけてきた人だ

アスファルトとお金
砂と彼自身
紙人形は くるりと返しても
別人にはなれないのに
彼は
脳天から 真っ二つに 自分を
切り離して いってしまった